

# 聞名仁教

第95号  
(発行日)

2018年8月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638113 西宮市  
甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp

http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日 午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日 午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日 午後6時30分始。

\* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

## 人の本質に合う念仏

最近、ある仏教雑誌を読ん  
でいましたら面白い記事が出  
ていました。それは禅宗(曹  
洞宗)の板橋興宗禅師(一九  
二七年生)のインタビュー記  
事でした。

板橋師は曹洞宗本山総持寺  
の貫首さらに曹洞宗管長まで  
された方で、現在九〇歳ぐら  
いの老師さんです。

師は禅宗のお方だから「人  
間はつぎつぎ考えるから苦し  
む。考えない方法として宗教  
がある。神様が私をみそなわ  
しておるから、その神様に全  
てをお任せする。あるいはナ  
ンマンダーと唱える。また坐  
禅して自分で考えない方法を  
実践するなどである」と言わ  
れます。

そして師は、数十年間坐禅  
を組んできた方ですが、坐禅  
中につきつぎに考えごとをし  
てしまうので、ある時から「ナ  
ンマンダー、ナンマンダー」  
と唱えることにしたそうです。  
そうしたら、いらぬ考えがそ  
れ以上続かなくなつてこれは  
いいということ、しばしば

ナンマンダーを繰り返してい  
たそうです。誰かに罵られて  
嫌な気持ちになつたら「ナン  
マンダー、ナンマンダー」と  
唱える。そうするとグチグチ  
考えることが途絶える。

それで総持寺に居る頃、宗  
務庁の偉い禅宗の坊たちの前  
で、そのことを言つたら、「い  
つから真宗の坊さんになつた  
んだ」と言われたそうです。

それで「ははあ、なるほど、  
私は真宗の坊さんだとか、宗  
派のためなどと考えていない  
けれど、人はそう見る」と気  
がついて、それで「ナム」に  
したり「無心無心大無心」な  
どとやったりしたけれども、  
やっぱり「ナンマンダー」が  
一番自然に声に出て来る。そ  
れは親鸞聖人云々の問題じゃ  
ないですと。

そしてこんなこともあつた  
そうです。十四年くらい前に  
母親が危篤だというので、岩  
手県の釜石の病院にかけつけ  
た時のこと。母親が師の顔を  
見たとき、母親は息子という  
ことは分かつていて、師に対

して「ああ、ありがたや、あ  
りがたや、ナンマンダ、ナン  
マンダ、ありがたや、ナンマ  
ンダ、ナンマンダ」と言つた  
そうです。師はそれまで母親  
の口から「ナンマンダー」な  
ど聴いたことがなかったそう  
です。というのは、母親の実  
家は曹洞宗だし、嫁ぎ先は(師  
の家)は臨済宗で、「ナンマン  
ダー」の雰囲気なんか一つも  
ない家庭でした。それなのに  
何故か、死ぬ最期になつて意  
識が衰弱してきた時に「ナン  
マンダー」が出て来た。意識  
が衰弱していても法衣を着た  
息子が分かつたのでしよう。

「ありがたや、ナンマンダー、  
ナンマンダー」と自然に出て  
来た。

それで師がつくづく思われ  
たのは、「ナンマンダー」は宗  
派を超えて「ナンマンダー」  
でいいと思う。「ナンマンダー」  
という語呂の良さ、七〇〇年  
も言い伝えられた日本人の体

質に合っていてリズム感が素  
晴らしい、と師は言われる。

ナンマンダーは日本人の体  
質に合くと板橋老師は言われ  
ます。その通りだと思います。  
それはおそらく日本人の体質  
というより人間の体質に合う  
リズムではないでしょうか。

『歎異抄』には、「たもちや  
すくとなえやすき名号を案じ  
いだしたまいて」とある如く、  
如来法蔵様は称えやすくたも  
ち易い行いは何かを思案され  
て、その結果「ナムアマミダブ  
ツ」を取り上げられて私たち  
に「これを称えよ、これをた  
もてよ、与えるぞ」とお勧め  
下さつた。ですからナンマン  
ダーは人間が考え出した行で  
はなく、如来法蔵様の智慧  
から現われた行でありましよ  
う。

板橋師は、人間はあれこ  
れ考えるから苦しむ、念仏は  
その考えをおっかけなくして

《 盂蘭盆会法要 》

八月十日 (金)

午後二時始まり

\* 法要の際、法名をご持参下されば仏前に安置させて  
いただきます。

くれる行だと言われる。

確かにそういう功德があるに違いない。実際、ナンマンダーナンマンダをしゅつ中称えておれば、ノイローゼの一つも直るのではないかと思われる。

カトリックの神父で先年亡くなられた井上神父はフランスで数年間厳しい修道生活をされて日本に帰ってこられたが、西洋のキリスト教は日本人には肌が合わないと実感され、日本人にキリスト教を土着させるにはどうしたらいいかを課題にされました。

その中で法然聖人を非常に慕われて本まで出版されました。その井上神父は晩年、南無阿弥陀仏ならぬ「南無アツバ」と称えることにキリスト教の信仰は結集する考えられ、「南無アツバ」「南無アツバ」と唱名されていたとのことです。

アツバとはイエスが神を「アツバ」と読んでいたと言うこととで、アツバとは「お父さん」という意味だそうです。

父なる神に南無（帰依）する信仰をこの唱名に表されたのでしよう。もし井上神父が浄土教に先んであつておられたらさぞ「ナンマンダー」を有難く思われたことでしょう。

ただ、真宗の念佛は単なる易行でもなければ、自分の考えを追っかけない行でもなく、「本願の念仏」であります。

如来法蔵様は単に人間の心理状態を安らかにするために念仏をお勧めくださるのではありません。如来様は私たちに「称えるばかりで必ず浄土に生まれさせる」と誓われ、称名念仏を往生の行と決定されたのです。ですからお念仏はこの誓いの通りに私たちを浄土にいたらしめたもう行であります。親鸞聖人は『唯信鈔文意』に、

「この如来の尊号は、不可称・不可説・不可思議にましまして、一切衆生をして無上大般涅槃にいたらしめたまう、大慈大悲のちかひの御ななり。この仏の御名は、よろずの如来の名号にすぐれたまえり。これすなわち誓願なるがゆえなり」

と仰せくださっています。これがお念仏の中身です。ですから一声称えて、一声聞く。その声に於て「この南無阿弥陀仏で汝を涅槃に至らしめる」との誓願を聞くのです。

そういう広大な誓いが掛けられているナンマンダーです。

世の中には、唱名を宗教行にしていくグループがいくつもあります。キリスト教の一派には「クリエ・エレイソン」という名をしばしば繰り返すことによつて神様との交わりをしていこうという行があるようです。

「クリエ・エレイソン」とは「キリスト・我をあわれみたまえ」という内容だそうです。ただこれはやや唱えにくいですね。しかもどこまでも人間の側の修行としての行です。

あるいは「ラーマ」という神様の名前を「ラーマ・ラーマ」と繰り返して唱えるヒンズー教の行もあります。これは唱え易いですが、これも人間がラーマ神の名を唱えて神との交わりを深めようとする人間の修行としての行です。「南無妙法蓮華経」は経の名を唱える行ですが、これもナンマンダーほど唱え易くなく、しかもなお人間の側からの行でありましょう。

南無阿弥陀仏は漢字ですが原語はインドの梵語です。梵語の意味から押さえていきますと普遍的な意味を表してまいります。親鸞聖人はそこをばつきりさせて、「南無」とは

帰命という意味で「帰せよ」の命（おおせ）、すなわち「まかせよ」であり、「阿弥陀仏」は量り無きいのちと光の働きの意味で、しかも「撰取して捨てざれば阿弥陀となづけたてまつる」（和讃）という意味を表していて、「汝を引き受け、助ける」との救済意志を表しています。

ですから南無阿弥陀仏は、量りなきいのちと光の仏であるアミダ仏が「私にまかせなさい、助ける」と私に喚びかけてくださっている言葉であり声であると親鸞聖人は教えてください。

もはや人間の側の行では無くて、アミダ仏が私の上に現れ行じてくださる如来様の現行であります。まことに大慈大悲の御名であります。

実際、ナンマンダーは称えやすい行であり、持続しやすい行であり、どこでもだれでも行じることのできる行でありつつ、「そのままなりで我にまかせよ」と救いをつげても

う如来の行（はたらき）であります。同時に如来様ご自身が「ここに汝とともにいる」と現れたたもう行であります。この南無阿弥陀仏は人間の本质に合っていると同時に、南無阿弥陀仏の言葉そのものが普遍的な真実を表現していますから、世界中の人が称えてしかるべきものです。世界中の人にそのまま称えられる可能性のある称名だと思えます。

ですから縁があればだれにでも、「困ったら南無阿弥陀仏と称えてみませんか」とお勧めめしたいぐらいです。ただ、当の真宗門徒がお念仏を申さなくなっているのが今日の現状です。もったいないですし、如来法蔵様の悲しみであります。しよう。（了）



## 《《秋季彼岸会》》

九月二十二日（土）

午後二時始まり

# 大寂定にいりたまひ

(和讃問答)

大寂 定にいりたまひ

如来の光顔たえにして

阿難の恵見をみそなわし

問 斯恵義とほめたまう

(現代語意識)

釈尊は大いなる静かな三昧の境地に入られ諸仏と念じあい、アミダ如来のお心と一つになつて、お顔が光輝かれた。それを見て阿難は「今日釈尊は今までにない素晴らしい境地に入つておられるに違いない」と感じて思わず釈尊に「どうしてですか」と問われた。それをご覧になつて、釈尊は尋ねた阿難の智慧をおほめたまふた。

(語句)

大寂定ー 心が集中して深い境地に入り、アミダ仏のお心と一つになるような三昧  
問 斯恵義ー 阿難が深い智慧でもつて釈尊に問うたこと

N 「大寂定とは」

D 「定とは禅定のこと、心

が静かで集中し一つになつて  
いる状態のことです」

N 「なぜ禅定といわれずに大  
寂定といわれるのですか」

D 「アミダ仏という絶対の真  
実に全く一つになつて非常に  
深く静かな状態になつておら  
れるからでしょう」

N 「なぜ、光輝くお顔になら  
れたのですか」

D 「アミダ仏とお心が一つに  
なつてアミダ仏の大慈大悲の  
本願を感得され、本願は一切  
衆生を平等に救う功德がある  
と感じられたからではないで  
しょうか」

N 「釈尊はアミダの本願を完  
全に感得し、(これで衆生は助  
かる)と、非常に喜び満足さ  
れたのでしょうか」

D 「ええ、そういつていいと  
思います。この和讃に対して  
宗祖は左訓しておられます。」

N 「どのように注釈されてい  
るのですか」

D 「静かに静かにましますこ  
と、ことに日頃に勝れましま  
したもうゆえは、ただ阿弥陀  
の名号を説きたまわんとて世

に出でましますこと、ことに  
勝れ、めでたくましますおん  
かたちなり」と

N 「これはどういう思し召し  
ですか」

D 「釈尊の境地が日頃と違つ  
てことに勝れてましますのは、  
アミダ仏の本願名号をこそ説  
かんがために世に出られたの  
であり、いまこそ本願の法を  
説く縁が熟したために光輝か  
れたとの思し召しでしょう」

N 「説きたまわんとて世に出  
でまします」というのは」

D 「釈尊がこの世に生まれて  
仏となつて説法されること  
す」

N 「その説法とは」

D 「アミダ仏の本願名号を説  
こうとされるのです」

N 「弥陀の名号・南無阿弥陀  
仏こそが万人の救いの法であ  
ると感得されたので、それを  
説く縁が阿難の問いによつて  
開かれたのですね」

D 「ええそう伺います」

N 「それで阿難は(お釈迦様、  
今日はどうしてそれほど光輝  
いておられるのですか)と問  
われたのですね」

D 「ええそうです」

N 「この問いがきっかけで釈  
尊は本願の名号を説かれるこ  
とになつたのですね」

D 「ええ、それで釈尊は阿難

に対して(阿難よ。問いたて  
まつるところ、甚だ快し。  
深き智慧・真妙の弁才を發し  
て衆生を愍念してこの慧義を  
問えり)と阿難を誉めておら  
れるのです。これは仏説無量  
寿經の釈尊のお言葉です」

N 「阿難は釈尊に誉められて  
びつくりされたのでしょうか」

D 「ええそう思います、阿難  
は、釈尊は今日は素晴らしい  
境地に居られるゆえお顔が光  
り輝いておられると迄は認識  
しておられたでしょうが、こ  
の問いが一切衆生の救いの扉  
を開くほどの大事な縁である  
とまでは感じてはいなかつた  
と思います」

N 「釈尊は、汝の問いは汝の  
深い智慧によつて衆生をあわ  
れむ、その心からの問いであ  
るとまでいわれるのですね」

《二〇一七年度東本願寺基金御懇志報告》

- 懇志者名(敬称略)
- 青木宏克 赤股一夫 秋常芳子 浅野真由美 足立美明 幾代禮四郎 石川紀美子
  - 伊東清志 井上守 今村光志 岩谷龍 岩田能一 植田節美 小澤ちづ子 小畑住子
  - 香川郁夫 加藤 忠 鹿野良子 萱島聖志 川端靖雄 窪ナル子 古賀智敏 児玉
  - 慶子 佐藤孝幸 下野誠二 下野知恵子 新保弘吉 寿賀晴剛 関有江 谷村往世
  - 津田衛一郎 寺坂典子 土居令子 長井一江 中川政二 中野タカ子 中村千和
  - 男 中村暢明 中村徳積 中村ホミ子 中村幹夫 中村美登子 中山 緑 七
  - 村文子 西塚祥子 野原佳子 長谷川満 泰 京子 濱 秀子 林 久司 原
  - 崎佳水 福井靖弘 前田ふくの 増成和輝 町百合子 宮伊勢子 三宅真知子
  - 宮野勲 宮野エイミ 宮野純孝 宮野道子 室塚良治 森野茂治 山下絹子
  - 山下東洋栄 山下征洋 横田ミチ子 吉岡正人 吉田徳子 吉ノ蘭睦枝 亮
  - 木与志 山下悦子 石田君代 能戸昇志 塩出省吾 福村義明 石田豊司

以上の皆様方より御懇志を賜りました。大谷派(東)本願寺の方に納めさせて戴きます。有難うございました。(総額二二二〇〇〇円)

# お便り

T・S氏からの便り

(T・Sさんの所感『木村無相師臨終法話注記』からの七月号よりの続きです。太字の部分は無相さんのお便り)

法信⑩より(ニセ札信心)

「善信が信心も上人の信心も一つなり」。こうした「他力の信心」その中身は弥陀の「願心」、弥陀そのものであるとい

ってよく、我々のいわゆる「信心」といったものではないのですよ。  
他力回向の眞実信心によつてのみ、そくばくの業を持ち続ける身ということも思い知らされ、このようなもの、このような無信無仏法、逆傍闡提の身はただ念仏のほかなしと信じ思い知らされるのであるから、普通に「信心信心」と思っているような信心は全くいらぬのですよ。天下に通用しない「ニセ札」なので

☆私思う。今まで我が心に信心というモノを得なければ悟らなければと思ひ違ひをしていました。私の方には何の関

係もなかったのです。ただ「弥陀の願心」にただ頭が下がること「本願のかたじけなさよ」と知らされることでありました。迷いに迷っているわが機の上に掛かり切りの本願でありました。我が機に信心というモノを受け取らなければということが「ニセ札」信心であると初めて戴けたのです。弥陀の願心であるゆえに「善信が信心も上人の信心も一つなり」と領けるのです。絶対の金剛の弥陀の信心であります。

法信⑩の続き(信心まんじゅう)

「信心まんじゅう」のあんこは、中身は、弥陀の智慧、大悲の願心のことなのです。それで、「御信心をいただく」ということの実質は「仏智」をいただくこと、「弥陀の切なる願心」をいただくことで、「助けんとおぼしめしたちける本願」のほか別製の「信心」というようなモノガラがあるのではないのですよ。

☆私思う。本当の信心とは「弥陀の切なる願心」をいただくということ。つまり「法の信心」を信知せしめられるということ「本願のかたじけなさ

よ」のほかには信心はありませぬ。我々凡夫の側には信心はないのです。あれば本願とお別れです。従つて我には一切信心も仏法もテツポウもないのです。我が心に何か信心仏法があると勘違いすることを「自性唯心に沈めり」というお論ごろんなのであります。とは言え我に絶対無能の自己の深心がなければまたそれ故の我がための弥陀の願心であつたと思ひ知ることがなければ「本願のかたじけなさよ」はいただけません。(続く)

## 信心夜話

親鸞聖人のお言葉に、

「しかるに常没の凡愚・流転の群生、無上妙果の成じがたきにあらず、眞実の信樂実まことに獲ること難し。何をもつてのゆえに。いまし如来の加威力に由るがゆえなり。博く大悲広慧の力に因るがゆえなり」

(信の巻)

とあります。「信心獲得」とか「信心を得よ」とか聞いて、なんとか信じたい、信心を得たいと、信心を獲ることを自分の仕事のように思つて、信心を獲よう獲ようとするが、

一向に信心は獲られない。「どうしたら信心が獲られるのか」と尋ねまわるのである。

しかるに宗祖は「眞実の信樂まことに獲ること難し」と仰つておられる。信心は人間の側から獲ようとしてもそれは極めて難しい、要するに不可能だとの仰せである。

では信心を獲ることが出来ないのなら、仏になる因は無いことになり、助からぬことになりはしないか、という疑問が当然起こる。

ところが續いて「如来の加威力に由るがゆえなり。博く大悲広慧の力に因るがゆえなり」と仰せられるのである。信心はアマダ仏の大悲の力に由つて私たちに起るのであると。

如来様の大悲の願力は光明と名号として私たちに働いてくださる。光明は万人を照らし、諸仏善知識のお説教となつて私たちに聞かせてくださる。だから本願の教法を聞くことは光明に触れていることになつていのである。

今一つは名号で、如来は光明だけでなく名号(お念仏)でもつて私たちを救おうとされる。お念仏をおすすめになり、私たちにお念仏を称えさせ聞かせていく。聞其名号せ

しめたもうのである。私たちはこの南無阿弥陀仏を口に称え、南無阿弥陀仏と聞く。

南無阿弥陀仏のいわれは要するに「助からぬ者を助ける」との大悲のお誓いである。南無阿弥陀仏を称えつつ、念仏の声について「助からぬ汝を助ける」の仰せと聞くのである。初めは自分に言い聞かせるように聞くのであろう。

ところが、南無阿弥陀仏の中に(へまるまる引き受けるで、まかせてくれよ)の慈悲大悲の仏心がこもっているゆえに、聞其名号のところをいつしか大悲心が凡心にとどき、信心歓喜の信心が回向されるのである。そこでは(聞くままが信)である。

アマダ仏は全能者ではない。法蔵菩薩は一切衆生を平等に仏にしたもう法を成就し、それを回向するはたらきを成就してアマダ仏になられた。すべての衆生を救える法を成就されたゆえにアマダ仏になられた。それを南無阿弥陀仏として与えようとはたらいてくださつて、私たちの口に称えられ耳に聞かしてくださる。私たちはそれを聞き受ける(聞其名号)か、聞き捨てるかだけである。今今といつでも救いはここに來ているのである。